

## 講師紹介

ガバナー補佐・会長・幹事会

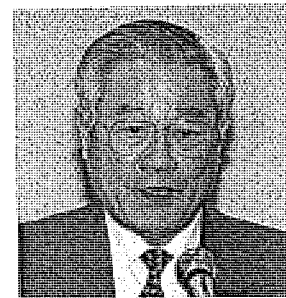
## 講師プロフィール



地区代表幹事  
野々上 浩史

深川先生は、当津山クラブにも何回もいろんなことで講演、その他の研修会等にもおいでをいただきまして、大変お世話になったパストガバナーでございます。そういうことで、今回も大変ご無理を申し上げましたところ、気持ちよく受けいただいて、今日お運びいただいたわけでございます。ここに、28ページに詳しく出ておりますので、簡単に先生のプロフィールをご紹介します。

深川先生は伊丹ロータリークラブのメンバーでございまして、1990から91年度のパストガバナーを務めておられます。ご職業は弁護士、民事の弁護士さんでございます。兼職として学校法人の大阪学園理事長、社会福祉法人の伊丹社会事業協会の理事長等の要職を今お務めでございます。ロータリー歴は、1973年に伊丹ロータリークラブにご入会になられまして、それ以後90年、91年度のパストガバナーをお務めになられまして、その後何回もRI会長代理としても、ちょっと読みますと5回、いろいろな地区のRI会長代理をお務めになっておられますし、地区大会のパネリストも数多くをこなされておられ、また記念講演等にも5回おいでになっておられますようございまして、私も本当に長い間お世話になっておる方でございます。そういうことで、今日のこの会に是非ともということでおいでいただきまして、本当にご遠方ありがとうございました。皆さんのいろいろなロータリーの勉強のためになることだと思いますのでどうぞ、最後までよろしくお聞きいただきたいとお願いいたしまして、深川先生のご紹介を終わらせていただきます。今日は、これからどうぞよろしくお願いいたします。



深川 純一先生

伊丹ロータリークラブ会員、マルチプル・ポールハリスフェロー、ベネファクター、メモリアル・コントリビューター、米山功労者、RI第2680地区パストガバナー(1990~91)  
生年月日●1930年2月14日

## 『ロータリーの魅力』

### 《職業分類》

弁護士—民事

### 《学歴》

1952年 関西学院大学法学部卒業

### 《兼職》

学校法人 大阪学園理事長  
社会福祉法人 伊丹社会事業協会理事長

### 《ロータリー歴》

1973年3月 伊丹ロータリークラブ入会  
1990年7月 1990~91年度RI第268地区ガバナー  
1991年12月 アジア第1第3ゾーン研究会パネリスト  
1992年1月 1992年RI規定審議会代議員  
1992年9月 RI第2540地区大会・RI会長代理  
1992年10月 RI第2590地区大会・パネリスト  
1993年4月 RI第2510地区大会・パネリスト  
1995年4月 RI第2810地区大会・パネリスト  
1996年10月 RI第2780地区大会・RI会長代理  
1997年4月 RI第2700地区大会・記念講演・講師  
1998年11月 RI第2670地区大会・パネリスト  
1999年10月 RI第2710地区大会・RI会長代理  
1999年10月 RI第2830地区大会・記念講演・講師  
2000年10月 RI第2800地区大会・RI会長代理  
2000年11月 RI第2730地区大会・記念講演・講師  
2001年4月 RI第2700地区大会・記念講演・講師  
2001年10月 RI第2780地区大会・記念講演・講師  
2001年10月 RI第2600地区大会・RI会長代理  
2001年10月 RI第2790地区大会・記念講演・講師

## 講演

# 「ロータリーの魅力」

ガバナー補佐・会長・幹事会



深川 純一

今日は、ロータリーの魅力というテーマを頂いております。先ず、ロータリーの魅力という場合に、一体、何をもって魅力なのか、と一言をはっきりさせておく必要があると思うのであります。

元来、魅力という言葉は主観的なものであります。例えば、女性会員の問題を取り上げても、或る人は、女性がロータリーに入会するのは魅力的だと言います。しかし、或る人は、クラブと言うものは元来男性だけの集いであったのであるから女性が入会することは魅力的でないと言います。この様に、魅力というものを主観的にとらえると、人様々で全く議論になりません。

そこで、ロータリーの魅力とは何かと言うと議論は、結局ロータリーそのものに内在する魅力は何か、言わばロータリーの本質論に関わる視点から捉えられなければならないと思うのであります。

そこで、ロータリーそのものに内在する魅力、ロータリー自体が持っている魅力とは一体何かという事ではありますが、先ずロータリーも一つの社会制度でありますから、社会制度としての魅力があります。

ローマは一日して成らず、と言われてるようにロータリーも一日して成らなかったものであります。今日のロータリーは、一つの社会制度として巨大な組織を作り上げました。2003年6月現在、クラブ数31,561、ロータリアン数1,227,545名に達しています。これはまさに、ロータリーに社会制度としての魅力があったからであります。

全ての社会制度、例えば農業制度、会社制度、学校制度、更に地方自治体から国家に至るまで、全て人間が

作り出した社会制度というものは、社会の要請に従って生まれ、社会の要請に従って発展し、社会の要請が無くなれば、即ち魅力がなくなれば脆くも潰え去っていくものなのであります。

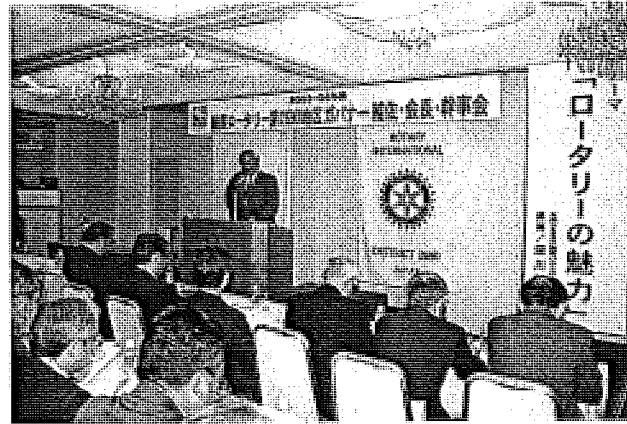
例えば、紀元前3世紀から紀元後3世紀まで隆々として栄えた古代ローマ帝国、これも社会の要請によって生まれ、社会の要請に従って発展し、社会の要請がなくなると、紀元後3世紀に脆くも潰え去ったのであります。

ロータリーも1905年、その当時の社会の要請によって生まれるべくして生まれ、社会の要請に従って魅力がある故に発展し、魅力がなくなって社会の要請がなくなれば消え去ることになるのであります。

ただ、古代ローマ帝国のように国家が潰れたり、或いは諸々の社会制度が潰れても、人間の思想とか人間の開発した原理というものは、それが良質であれば消え去ることはなく、時代を超越するのであります。例えばキリスト教の思想は、2000年の歳月を閲して未だに私達の心の糧になっているのであり、道元禅師の正法眼蔵の提唱は650年の歳月を超えて現在に生きているのであります。これは人間の思想の魅力ということが出来ます。

一つ例を挙げますと古代ローマ帝国は、紀元後3世紀に崩壊しましたが、その直前にローマ法という素晴らしい法律を作り上げていたのであります。

そのローマ法の中に内在する思想というものは、それが良質であったが故にその後1700年の歳月を超越して、脈々と今日に伝えられているのであります。それはどういことかと申しますと、我が国にはご承知のとおり民法と言



う法律があります。その第206条には、所有権についての規定があり、所有権というものは自分の物を自由に使用、収益、処分する権能を言うことと定義されています。この定義は、実は古代ローマ法の中で開発された思想でありまして、その思想は今日に至るまで変更される事なく現在の民法に伝わって居るのであります。と言うことは会社の制度とか組織とかいうものは、社会の変遷によって魅力がなくなり消滅しても、良質な思想とか原理とかはそれが魅力あるが故に永遠に伝わっていくと言うことを示している訳であります。

一つ例え話をしておきます。二人の坊さんが刀をもって喧嘩をしました。一人の坊さんが他の坊さんの首を刀で刎ねました。その首が空中に飛び上がって、そこに止まり、やがてその首が二千年後の或る坊さんの首にスポッと納まったと言う話であります。この話は一体何を意味するのでしょうか。このような公案をいかに説くか、という問題であります。

空中に飛び上がった首を思想と考えてください。そして、倒れた胴体を制度・組織と考えてください。制度とか組織というものは、首を切られたときに潰れます。古代ローマ帝国も紀元前3世紀に制度・組織は崩壊しました。しかし、そこに生まれた優秀な思想、即ち、ローマ法の所有権の思想と言うものは、それが魅力あるが故に1700年に亘って生き長らえて、やがて現代にその思想を受け入れる人が出てきたときに、その首にスポッと納まって、再び社会に受け入れられて蔓延していくという物語なのであります。これは、人間の思想の魅力であります。

そのような例が現実にあるのか、と言いますと、我が国の戦前、戦中、戦後のロータリーにその例を見る事がで

きるのであります。即ち、戦前のロータリークラブは、御高承の通り、昭和の初期から軍閥の弾圧を受けました。

なぜ弾圧を受けたのかと言いますと、ロータリークラブと言うものは、アメリカに本部があるスパイの手先だとか、フリーメイソンの隠れ蓑だとかいう汚名をきせられて、軍閥の弾圧を受けたのであります。これは、その当時の社会にとっては、ロータリーに魅力がなかったということでもあります。

やがて、次第々々に弾圧がきつくなって、昭和15年8月8日静岡クラブが真先に解散しました。次いで、8月12日に大阪クラブ。19日に岡山クラブ。25日に京都クラブが解散すると言ふ具合に、日本全国のクラブが次々に解散し、最後に、9月11日、東京クラブが解散しました。東京クラブの壇上に日本ロータリーの創始者米山梅吉先生が立たれました。

『重い足を引きずって私は今ここに立つ。こんなつらい気持ちで皆さんに話さねばならないのは、20年来初めてである。私はただ、かかる結末になったことをお詫びしたい。

日本国中のロータリークラブが一致団結しているならば兎も角、このように散り散りなれば、最早手の施しようがない。ここはひとまず解散をして時の来るのを待とう。

創立以来の20年を顧みるとき、誠に感慨無量である。この間、ロータリークラブが如何に国家社会に貢献して来たか、その歴史は燦として輝いている。私の眼底には、絵巻物の如く、それらが彷彿としてくる。私はただ、皆様に御礼を申し上げ、自分の不行き届きをお詫びしたい』これが日本のロータリーが軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿でありました。

では、それでロータリーがなくなったのかと言いますと、ロータリーという制度・組織は壊滅しましたが、ロータリー運動はなくならなかったものであります。それは何故か。ロータリーの思想が良質であるが故に、ロータリーに魅力があったからであります。

解散当時、日本国内には、ロータリアン数2142名、クラブ数48、本州に37クラブ、朝鮮・満州にそれぞれ4クラブずつ、台湾に3クラブ、合計48クラブでありました。今日のロータリーから見ると、一地区も満たない、誠にささやかな組織ではありましたが、皆、粒よりのロータリアンの集団でありました。したがって、大多数のロータリアンは、ロ

ータリークラブが解散して無くなってもロータリー運動は止めなかったものであります。

戦後、あるロータリアンが、戦前のロータリーと戦後のロータリーを比較して、戦前のロータリーを金平糖のロータリー、戦後のロータリーを角砂糖のロータリーと評したことがあります。金平糖は、形はまちまちで不揃いだが、硬くてしっかりしていて咬んでも簡単に崩れないが、角砂糖は、形は整然として美しいが、柔らかくて、紅茶に入れるとすぐ溶けてしまうと言うのであります。

戦前のロータリーは、まさに金平糖のような粒よりのロータリアンの集団でありました。

ところで、ロータリークラブが解散したので、もうロータリークラブという名前は使うことが出来なくなりました。そこで、神戸ロータリークラブは、例会日が木曜日でありましたから神戸木曜会と名前をかえました。大阪は大阪金曜会、東京は東京水曜会と名前を変えて例会活動を続けたのであります。ちょっと変わったところでは、福岡は清く和すると書いて福岡清和会、札幌は札幌職能協会、これは職業奉仕をもじったものであります。

神戸クラブは、9月5日に解散し、その一週間後の9月12日は神戸木曜会と名前を変えて、早くも例会を始めました。名前を変えれば例会活動をしなくてもよいではないかと、考える人が居るかも知れませんが、何故解散させられたのかということ考えるとこれは大変危険なことでありました。

当時の軍閥は、ロータリーをアメリカのスパイの手先だと決めつけていたのでありますから、一旦解散しておきながらまた、同じところで同じメンバーが例会をしている。一つ間違えると憲兵隊にしょっ引かれる虞れがあったのであります。

やがて、神戸は戦災で丸焼けとなり、例会場のオリエンタルホテルも壊滅しましたが、例会は止めなかったのであります。あるビルの地下室に例会場を移して、戦災で停電のため昼でも蠟燭が揺らめいているような廊下を通して、勿論食堂はありませんから弁当持参で例会を続けたとされています。

このようにして、昭和24年に国際ロータリーに復帰するまで神戸クラブは一回も例会を休んでいなかったものであります。軍閥の弾圧を受けながら、身の危険を冒してま

で、あたかも隠れキリシタンのようにロータリー運動を続けて行ったのであります。

何が彼等をそこまで燃え上がらせたのか。

それは、例会を中心とするクラブ親睦の良質性、その親睦のエネルギーから生まれた職業奉仕を中核とするロータリー思想の崇高性、その思想にぞっこん惚れ込んでいたが故にロータリー運動をやめることが出来なかったものであります。これは思想としてのロータリーの魅力であります。

これがまさに、先程の坊さんの首の話にあてはまるのであります。即ち日本のロータリーは、昭和15年9月11日に東京クラブの解散を最後に完全に壊滅しました。ロータリーという組織が壊滅し、胴体と首が離れてしまった訳であります。

しかし、職業奉仕の思想を中核とする良質なロータリー思想は消え去ることなく、例会活動を通じて伝えられ、日本のロータリーが昭和24年に国際ロータリーに復帰したときに、胴体(組織)から切り離されて空中に飛び上がっていた首(思想)が、次の世代のロータリアンの首にスポッと納まり、そこから戦後のロータリーが再び発展して行ったと言う話になるのであります。

実はこの話には後日談があります。阪神大震災の時に、芦屋川ロータリークラブも壊滅しました。大震災の2日後、クラブの元会長の福本真一さんから電話がありました。『先生、例会場も事務局も会員の住居も事業所も全壊しました。しかし、クラブ例会を開いてはいけなんでしょうか。道端でもいいからとにかく皆で集まって励まし合いたいのです』

と言うのであります。私は『それこそ本当のロータリーの親睦だから是非おやりなさい』といって電話を切りました。後で報告を聞いたところ、震災直後の例会には13名集まりました。例会場は適当なところを探したようであります。その次の例会は21名、3回目は23名集まったそうであります。

要するに、芦屋川クラブは、震災での例会場も事務局も会員の住居も全て潰れましたが、例会は一回も休んでいなかったものであります。これは、まさに金平糖のロータリーと言うべきであります。

また、元国際ロータリー理事の今井鎮雄先生の所属

しておられる神戸西ロータリークラブは、テリトリーが大震災で壊滅した神戸市の長田区であります。したがって、殆どの会員の住居も事業所も壊滅しました。例会場のホテルオークラも使用不能になりました。

そこで、例会場がないので会員達は、村野工業高校という高等学校に集まりました。40名集まったそうであります。その高校には大震災で亡くなった670名の遺体が安置され、820名の被災者が詰め掛けていたのでありますが、会員達はそこで例会を開いたのであります。

私は、この話を聞いて戦前、戦中、戦後の日本のロータリーの精神伝統というものが脈々と受け継がれていることを実感したのであります。

このように、ロータリアン達が戦災や阪神大震災によって例会場も事務局も住居も事業所も何もかも失って無一物になった時に彼らが縋ろうとしたもの、それが実はロータリーであったと言うことは大変感動的な物語であります。余程ロータリーに魅力がなければ、このような事は起こらないと思うのであります。

最近のロータリーは衰退しているとか、墮落しているとか、とかく意見がありますが、私は大震災のような異常事態になったときにロータリーの真価が判ると思うのであります。その意味で私はこれらの体験を聞き大変心強くも思いましたし、嬉しくも思った次第であります。これは、ロータリーの魅力として忘れてはならない物語りだと思っております。

イギリスでは、「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」と言われています。この戦前、戦中、戦後の先輩ロータリアン達の話や、阪神大震災の話や「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」という言葉に心底納得する事が出来ると思っております。これはまさに思想としてのロータリーの魅力であります。

要するにロータリーの魅力と言うものは、ゴルフをしたり、旅行をしたり、酒を楽しむというような「感性的な親睦」の魅力でなく、ロータリー運動に内在する魅力即ち、ロータリアンの心を引きつけずにはおかない「精神的な親睦」の魅力なのであります。

感性的な親睦であれば、ロータリアンでなくとも地域社会の人であれば誰でも楽しんでいるのであります。極端な事を言えば暴力団でもそれがグループ活動である以上、

酒を飲んだり、ゴルフをしたりしているのでありますから、感性的親睦はあるのであります。

ロータリアンも同じように、酒を飲んだり、ゴルフをしていることには何ら変わりはありません。ではロータリーの親睦と暴力団の親睦と何処が違うのか。ロータリーの親睦とは一体何かと言うことを煮詰めておかなければなりません

ロータリークラブは、社交クラブであります。奉仕クラブではありません。米山先生は、「ロータリークラブでは奉仕クラブではない」と言いきります。「クラブとして奉仕すべきものは何もない。ではクラブは何をするところなのか。奉仕をするロータリアンを育てるところである」と言うのであります。このようにして、ロータリークラブは社交クラブであります。

したがって、基本的に先ず楽しくなければなりません。ロータリーは、宗教ではありません。お寺ではないのでありますから、酒を飲んだり、ゴルフをするのも結構、楽しいことは何をやっても結構であります。このような感性的親睦も大いに結構であります。

ただ然し、一点忘れてはならないことは、酒を飲んでも、ゴルフをしても何をするにつけても、己の足らざるところを他のロータリアンに学ぶ姿勢を持つべきことでもあります。即ちロータリアンがお互いに学び合うことによって自らを高め合うことがロータリーの親睦なのであります。

1989-90年度の国際ロータリー会長ヒューM.アーチャーさんは『ロータリーを楽しもう』というテーマを掲げました。

しかし、このテーマは随分と誤解されたようであります。それは、ロータリーを楽しもうと言うのだから、何でも楽しければいいのねと言って、酒を飲んだり、ゴルフをすれば良いと考えた人たちがいたからであります。

然し、それでは酒を楽しんだり、ゴルフを楽しんだことにはなっても、ロータリーを楽しんだことにはならないのであります。それはロータリーの魅力とは無縁のものであります。

アーチャーさんの言うロータリーを楽しむと言うことの意味は、ロータリアンが毎週例会に出て来て、親睦の内に例会を楽しみ、己の足らざるところを他のロータリアンに学び合いながら、自己研鑽に励み乍ら成長していくのを見るのは楽しいね、このロータリーを楽しもうと言うこと

であったのであります。このようなロータリーであって、始めて魅力あるものとなるのであります。では、このようなロータリーの魅力は、一体どのようにすれば作り出すことが出来るのでしょうか。一昨年度の国際ロータリー会長ラビツァさんは、ロータリーの衰退を警告しました。

何故、会員が減少するのか。経済的な不況が原因か。否、アメリカは好況であるにも拘わらず会員が減少している。

では、会員減少の根本の原因は何か。ラビツァ会長は、ロータリーに魅力がなくなったからだと言っています。

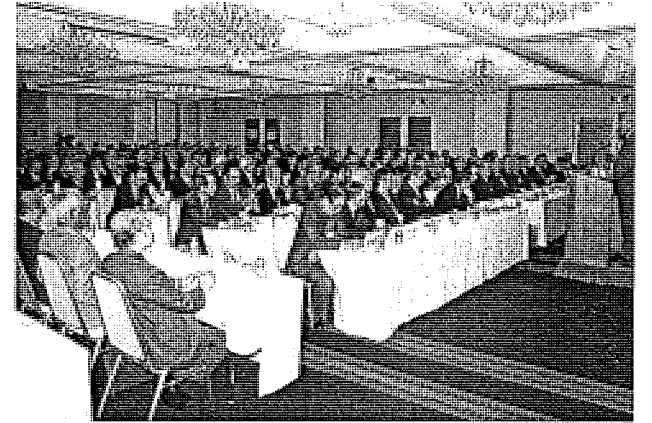
では、何故、ロータリーに魅力がなくなったのか。ラビツァ会長は、それはロータリアンがロータリーの基本的なルールを守らなくなったからだと言っています。したがってロータリーの魅力を作るには、先ずもってロータリアンがロータリーの基本的なルールを守らなければならないのであります。

そこでラビツァ会長のいう基本的なルールとは一体何か、ということに就いて、ロータリーの原理を整理しておきたいと思っております。

まず一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業一会員制のルールがあります。これはクラブ親睦を守るために、ロータリーの創立者ポール・ハリス自らが1905年2月23日に打ち立てた大原則であります。

それから規則的な例会出席のルールがあります。即ち自己研鑽のために毎週一回例会に出席することです。これは、1905年3月23日のシカゴロータリークラブの創立総会において決められた原則であり、ロータリー職業奉仕の基本前提になっている原則であります。

この二つの基本的原則は、ロータリーの核にある原則であります。この事について1959-60年度のRI会長Harold Thomasが『ロータリーモザイク』という本を書きました。これは1905年から1970年にかけて彼がその時代に生きたロータリーの指導者から、直に聞いた話を基にして書きつづったものであります。その著者の1970年代の章の冒頭に述べています。即ち『今日、我々ロータリアンが憂慮している問題がある。それはロータリーを今日の安定と力にまで築きあげてきたロータリーの二つの基本原則これが次第に稀薄、さらに稀薄にされて行く傾向がある。その二つの基本原則とは一業一会員制の



原則と規則的な例会出席の原理である。しかも、この二つの原則は単なる原則ではなくて、この原則の一つでも緩められていくとそれは最早ロータリーとは言えなくなるほど重要な原則である』と言い切っているのであります。したがってこの二つの原則はロータリーの核にある原則即ち、ロータリーの魅力の根源であるとも言えるのであります。

では一業一会員制の魅力とは一体何か。

自由競争社会では、同業者同士はお互いに食うか食われるかの関係に立ちますから、心を開くことができません。元ロータリー会長のエピソードを紹介しておきます。『私は、あの男を人格高潔な立派な人物だと思う。しかし、彼と居るとどうも心が落ち着かない。何故かなとよく考えたら彼と私は同業者であった』というのであります。このほど左様に、同業者というものはお互いに心を開き合うことが出来ないものであります。

そこで、クラブの中から同業者を排除してクラブにとって一番大切なクラブ親睦を熟成しようというのであります。親睦が熟成されれば、自らクラブは魅力あるものになるのであります。これがポール・ハリスの打ち立てた一業一会員制の魅力あるところなのであります。

ところが一昨年の規定審議会においてこの一業一会員制が廃止され、一業多会員制に移行しました(01-148)。その結果、どういことなるのかと言いますとクラブの中に同業者が沢山入って来ます。その結果、何億円にも換えがたい、金銭では買いきれないほど大切なクラブ親睦が失われてしまうのであります。これではロータリーの魅力などあり得ないのであります。

この一業一会員制の原則の廃止は、国際ロータリーの提案であります。ロータリーの魅力という観点からす

れば果たして如何なものかと思うのであります。

一つ極端な例を挙げますと、或るアメリカの大都会のクラブでは一つの職種に弁護士が50名入会しています。公認会計士が20名を超えているのであります。ポール・ハリスが打ち立てた一業一会員制の大原則は全く無視されているのであります。

一昨年の規定審議会の決定も、国際ロータリーの理事會がこのような現象に押し流されたのではないかとも思うのであります。このような状態ではロータリーに魅力を生み出すことなど到底出来るものではありません。

元来クラブというものは、一業一会員制の原則によって色々な職種の会員が居て初めて魅力あるものとなるのであります。したがって、私達は一業一会員制の基本前提である職業分類の原則を守らなければならないと思えます。現在この基本的なルールが大変乱れています。これではロータリーの魅力など失われるのが当然であります。

日本における職業分類適用の現状を見ても、たとえば酒造業の業界では、或る酒造会社の社長であると同時に、信用金庫の理事長でもある人が居るときに信用金庫の職業分類で入会します。或る酒造業の社長は山林業で入会します。他の酒造業の社長は貸しビルで入会します。このような操作をすれば、一つのクラブに酒造業者が数人入会することができることになります。

これは、一つには資本主義が爛熟して多目的企業が増えたことも一つの原因ではあります。同業者を排除すると言う一業一会員制の観点からは、このような会員選考は職業分類制度の正しい運営とはいえないのであります。また、例えば関連職種の10%の原則があり、医療業務という大分類の中では医師の会員数は正会員の10%を超えてはならないことになっています。したがって50名のクラブであれば、5名を超えて医師を入会させてはならないのであります。もう一人入会させたい時に悪知恵を働かせてその医師が猫を飼っている事を理由に「愛玩動物飼育」という職業分類を作って、その医師を入会させたとすればこれも職業分類制度の正しい運用とはいえないのであります。

この辺の所は昔から指摘されていたところでありまして、1923-24年度のRI会長であったガイ・ガンディカーが初期のロータリーのバイブルと言われた『ロータリー通解』

と言う本の中で「バラの木を一本庭に植えたことをもって、農業園芸と言う職業分類を作ってはならない」ということを言っています。したがって昔からこのような悪知恵を働かせる人はいた訳であります。

しかも現在のロータリーでもこのようなことが行われているようでは、ラビツァ元会長がロータリーの魅力がなくなって会員が減少すると言って嘆くのは無理はないと思うのであります。したがって職業分類表を整備して、それを厳格に適用していくこと、このことがロータリーの魅力を守りその魅力を育ててロータリーを発展させることになると思うのであります。

何はともあれ、昨今のロータリアンがルールを守らないことは、誠に目に余るものがあります。たとえば例会の途中退席の問題があります。昔のロータリアンは例会には例会時間の100%在籍するべきものという教育を受けていました。私共は、例会の途中で帰らなければならない時は初めから出席しません。しかし近年例会出席の60%と言うルールが制定されるに及んで、例会時間の60%在籍すれば、途中退席権利があるとまで主張する不心得者が出てきました。これは退席する権利があるのではなく、例会の60%在籍すれば途中で帰っても欠席にならないと言うだけのことであります。しかも12時30分に例会が始まって1時6分まで在籍するのであればまだしも、卓話の始まる前に堂々と退席していく会員がいます。これでは50%しか在籍していません。これは明らかにルール違反であります。にも拘わらずその事を恥ずかしいとも思わない。ロータリアンとしての誇りは一体何処へ行ったのかと思うのであります。そしてクラブもまたそのようなロータリアンにメイクアップカードを出しているのであります。クラブもロータリアンも挙げてルールを守る心が麻痺してしまったと言わざるを得ません。これではロータリーの魅力など生まれる筈がないのであります。

またロータリアンたるものは、約束を守らなければなりません。ルール守ることは、イコール約束を守ることです。この事は既に昭和6年の日本の2代目ガバナー井坂孝さんが、ガバナー月信第1号でロータリアンの拳々服膺すべき3ヶ条として提唱される所でありまして、

第一に、ロータリアンたるものは、約束を守るべし。

第二に、ロータリアンたるものは、賄賂を贈る事なかれ。

第三に、ロータリアンたるものは、徒に慈善事業に憂き身をやつす事なかれ。

第一の約束を守るというのは、ロータリアンは、皆職業人でありますから、契約を守ることを意味しているのであります。即ち、契約的正義の実現を説くものであります。契約を守るということは、ロータリアンの信用を確立する基本前提であります。近来、契約を守らないで恥じないロータリアンも出て来ましたが、

また約束を守るということは、時間を守るということの意味します。時間は万人の共有物であります。時間を守らないと言うことは他人に迷惑をかけることになり、更に自らの信用を失うこととなります。したがって、ロータリアンでは時間を守るということが昔からの精神伝統になっているのであります。そこにロータリーの魅力があったのであります。ところが最近例会に遅刻しても平然として、恥ずかしいとも思わないロータリアンが増えてきました。これではロータリーに魅力など生まれる筈がありません。

昔のロータリアンが時間を厳しく守った例を挙げておきます。西宮クラブの八馬啓さんは、メイクアップに行ったクラブで1分遅刻しました。すると彼は「1分遅刻しましたから、今日はメイクアップしないで下さい。しかし折角来たのだから皆と楽しく食事をして帰ります。」と言って、ビジターフィーを支払って最後まで例会を楽しんで帰られました。私は、その時ロータリーに入会してまだ日も浅かったのであります。これこそ本当のロータリアンだと思いました。

自分を規律すること極めて厳しい。そしてロータリアンとしての誇りを漲らせておられる。このようなロータリアンが居て初めてロータリーの魅力というものが出てくるので



あります。

第二の賄賂を贈ることなかれ、というのは賄賂の横行しない健全な取引社会、公正な自由競争社会の実現を説くものであります。親会社と子会社、元請けと下請けその他あらゆる取引関係において当事者の力のバランスが崩れると弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起こります。

これは自分だけが良い仕事にありつこうというエゴイズムの心に基づくものでありますから、元より同業共存共栄・公正な取引社会の実現という理想にほど遠いものであります。そこで、ロータリーは倫理運動の視点から賄賂の授受を厳しく戒めているのであり、これは職業奉仕論の核にある大きな柱であります。

殊に戦後は昭和電工疑獄を始め、ロッキード事件その他贈収賄事件が跡を絶ちません。まさに現在のロータリーの倫理の退廃ぶりは目に余るものがあります。したがってこの賄賂禁止の提唱は道徳を守る人間を作る、倫理的な人間を作るというロータリーの倫理運動としての面目躍如たる場面であります。

第三の徒に慈善事業に憂き身をやつす事なかれ、というのは弱者救済のために慈善事業はしなければなりません。それに憂き身をやつしてはならないのであります。即ち、

慈善事業はロータリアンでなくても出来ることあります。ロータリーの第一義は、ロータリアンの心の開発であり、それに基づく職業奉仕の実践によって、先ず自分の企業をどのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業に作り上げることが第一であり、その上で余裕があれば慈善事業に手を出しても良いということであり、これはあくまでも職業奉仕がロータリーの第一義であることを説いているのであります。

以上を要するに、井坂ガバナーの提唱は職業奉仕を中心とするロータリー観の提唱であり、ロータリーの神通力は実業の世界にのみ発揮せらるべきであると言いつているのであります。そしてこれが日本の戦前のロータリーの職業奉仕のバックボーンになり、ロータリーの魅力の根源となっていたことは紛れもない事実なのであります。

ところで、ロータリーの魅力を作るのは、1人ひとりの口



ータリアンであります。したがってロータリーの魅力作りに欠かせないのは、クラブのロータリアン教育であります。

昔のクラブが如何にロータリアン教育に力を入れていたかという例を挙げておきます。

昔、私の友人が神戸クラブに入会することになり、推薦者から入会前のロータリー教育を受けることになりました。推薦者が朝9時に俺の会社に来いというので、その人は言われるままに朝9時に推薦者の会社へ行ったら、推薦者はロータリーの歴史、思想、原理そして実践などについて夕方4時まで延々と説き聞かせたそうであります。その人は、閉口してうんざりしましたが黙って帰るのも悪いと思い、一つ質問をしました。すると推薦者は「お前はまだ何も解っていない、もう一度明朝9時に来い」ということになって、また翌日朝9時から4時まで講義を聴かされてやっと入会することが出来たと言っておられました。

何故ここまで厳しくするのか。それは一人でもロータリーに適しない人が入会すると何億円にも代え難いほど大切なクラブの親睦が壊されてしまうからであります。自分たちのクラブは自分たちで守る。これをクラブ自治権と言いますが、まさにクラブ自治権の確立のために、会員選考を厳しくするのであります。このようにして、良質なロータリアンばかりが集まることによって、ロータリーは魅力あるものになるのであります。

昨今これほど厳しく会員を選考するクラブは見あたりません。むしろ会員増強の声に押されて、誰彼かまわずお願い申し入れてしまおうと言う風潮があります。このように会員の質を無視すると、ロータリーの魅力など生まれる筈がないのであります。

もう一つの例は、東京南クラブであります。このクラブ

には例会場正面にグリーンのテーブルクロスのかかっているテーブルが二つあります。ここには入会6ヶ月未満の新入会員が座る事になっているのであります。そしてバスターガバナー、元会長、情報委員長等ロータリー経験の深い人達が座って、毎週口コミで教育してくれるのであります。これはクラブ自治権のもとに、自分たちのクラブは自分たちで魅力あるものに育てようとして、ロータリアン教育に力を入れているのであります。このようにクラブ自治権を確立することによってロータリークラブは魅力あるものとなるのであります。

ところでクラブの魅力ということに関して言えば、会員数の少ない方がクラブの魅力は増すのであります。例えば19世紀のイギリスにあった【ザ・クラブ】は、エドモンド・バークやスウィフトのような哲学者や文豪等わずか12名によって組織されていました。その後増員されても40名に止まっています。この様な極端な限定会員をとることによって、このクラブに入会することは最高の名誉とされているのであります。

1883年創立のイギリスのクラブ【アレクサンドリア】も上流社会の貴婦人のみによって組織された限定会員制のクラブでありました。ロータリークラブはそれと比較するほどのものではありませんが、それでも一業一会員制という限定会員制をとることによって、その魅力を維持してきたのであります。この様に限定会員制は、その限定の枠が厳しいほど威力を増すものであります。このことは【ザ・クラブ】や【アレクサンドリア】の例を見れば明らかであります。したがってロータリーの魅力という視点から見れば、一昨年の規定審議会において採用された一業多会員制は、一業一会員という限定の枠をゆるめる点においてロータリーの魅力を失わせるものであります。

ロータリーの魅力がなくなれば、社会の要請はなくなり、冒頭に申し上げたように、やがて古代ローマのように消滅してしまうか、消滅しないまでも会員は減少するだろうと思えます。現に昨今、ロータリーの会員は減少の一途を辿っているのであります。

殊に、一昨年の規定審議会で一業一会員制が廃止されて以来、ロータリーに幻滅の悲哀を感じて退会して行く人が多いのであります。昔は一旦ロータリーに入会すると退会する人はいなかったものであります。ロータリーに魅力

がありましたから皆さん、ロータリアンとしての誇りをもっておられました。

ところが、今はいとも簡単にロータリーを退会して行きます。これは、ロータリーに魅力がなくなったからであります。

国際ロータリーは会員の増強を呼びかけるのであればすべからずロータリーの魅力を取り戻すために、一業一会員制の原則を回復すべきであります。何故ならば一業一会員制なくしてロータリーの魅力なく、ロータリーの魅力なくして会員の増強はあり得ないからであります。

ところで、ロータリーの魅力についてどうしても心に留めておいていただきたいことはロータリー運動と申しますものは、倫理運動であるということであります。

ロータリークラブは、寄付団体でも福祉団体でも慈善団体でもボランティア団体でもありません。ロータリアンに奉仕の心を授け、倫理を提唱していく団体、即ちロータリアンの心の開発を第一義とする団体であります。したがって、例えば街角にタバコの吸い殻が落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずその吸い殻を拾うでしょう。しかしロータリーは、そこにロータリーの本願はないと言います。タバコの吸い殻を拾うことは避けて通ることができないにも拘わらず、それを拾うことにロータリーの本願はない、と言うと一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーはタバコの吸い殻を捨てない人を育てるところにロータリーの本願があると言うのであります。人を育てること、道徳を守る人間を作ること、その事によって世のため人のために動いて行こうとロータリーは言うのであります。見方を変えれば、それがまさにロータリーが倫理運動だと言うことを意味するのであります。

この点を捉えてある学者は『ロータリーとは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理活動である』と断言しているのであります。この意味で倫理活動であることは、ロータリーの魅力の源泉であると言えるのであります。この倫理運動であるという視点を見失いますと、ロータリーの職業奉仕が判らなくなり、ひいてはロータリー自体が判らなくなるのであります。

ではロータリーが倫理運動であるということが一体どこに書いてあるのかと申しますと、標準ロータリークラブ定款第4条の『ロータリーの綱領』をみますとロータリーがま

さに倫理運動であるということが一目瞭然に判るだろうと思うのであります。

ロータリーは倫理運動であるが故に古来、色々な理念を提唱し様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと言うものは20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであり、まさにこれは先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。それなるが故に、ロータリーの魅力があるのであります。

したがって、ロータリークラブに入会してただ漫然とロータリーライフを過ごすということは、先輩に対して甚だ失礼なことになると思うのであります。やはり縁あってロータリーに入った以上は高々と理想を掲げて色々な知恵を結集してくれた20世紀初頭の先輩たちに敬意を表して、その知恵に学ばなければならないと思うのであります。

何はともあれ、今ロータリーは巨大な組織になりました。しかしこのロータリーも98年の歴史を遡って行きますと、そもそもの発端はポール・ハリスという青年弁護士の頭脳に宿った一滴の発想、即ち一業一会員制の発想でありました。これが組織の原点であります。

そして、この発想のもとに32年間RIの事務総長を勤め上げたチェスレー・ペリー、ロータリーの哲学者アーサー・F・シェルドン、ミネアポリス・ロータリークラブの初代会長B.F.コリンズ等の人々が集まり、やがてそこに優秀な発想や原理が生まれました。その思想を慕ってまた沢山の人が集まりました。1912年の国際ロータリークラブの連合会会長グレンC. ミード、同じく1913年連合会会長ラッセルF.グライナー、同じく1914年連合会会長フランクL.マルホランド、同じく1915年連合会会長Dr.アレン・アルバート、1923年の国際ロータリー会長ガイ・ガンディー等であります。この人達によってまた色々な思想が生まれました。

このようにしてロータリーの思想の世界というものは、決して一枚岩ではありません。ポールハリス一人がロータリーを作ったわけではないのであります。彼は種を蒔きました。その種が芽生えて沢山の人が集まり、そしてまたそれぞれの人達がロータリーをこよなく愛するが故に色々な思想を提唱したのであります。

このように、ロータリーの思想の世界は1959-60年度の国際ロータリーの会長ハロルド・トーマスの著書『ロー

タリー・モザイク』という言葉に象徴されるように沢山の思想が、恰も美しいモザイク模様のように素晴らしい思想の世界を形作っているわけでありませぬ。

モザイクというのは、ガラスの破片であります。赤、黄、緑、青、様々な色のガラスの破片が集まったモザイク模様のように、色々な思想がロータリーの思想の世界には散りばめられているとハロルドトーマスは観たのであります。

そしてそれらの思想の下に、様々な奉仕の実践が行われ、それが類型化された中でこれこそロータリーだということ象徴的に表しているのが、実は職業奉仕なのであります。

この点をとらえて誰言うとなく、感覚的に唱えられ出したのが『ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり』という言葉でありました。私達は今から20年位前までは、耳にタコが出来るほどこの言葉を聞かされたものであります。しかし、最近では殆どこの言葉を聞きません。これもロータリーの衰退を物語るものかとも思うのであります。

ただ、『ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり』という言葉から一つから誤解が生まれました。即ちロータリアンでなければ職業奉仕はできない、とか、ロータリアン以外の人は職業奉仕をしていない、という思い上がりりがロータリアンの中にあつたことも事実であり、またそのような誤解を生んだ言葉でもありました。

しかし、昨今ロータリアンの中で本当に職業奉仕を実践している人が、一体どれ程いるのかと考えた場合、答えは甚だネガティブであろうと思うのであります。逆にロータリアン以外で職業奉仕の原理を実践している人は沢山おられます。古くは二宮尊徳翁もその一人でありました。私達ロータリアンは、謙虚に反省する必要があると思うのであります。

要するにロータリアンは倫理運動の立場から、世のため人のための心をもって職業を営むべしと説くのであり、その結果として『信用』という保護膜に包まれて長期的に安定した利潤を着々と獲得することが出来ると説くのであり、ここにロータリーに魅力が生まれるのであります。

このことをもう少し具体的に言いますと、ロータリアンの職業をとりまく取引関係、同業者の関係、下請の関係、そしてロータリアンの企業を如何に管理するかの関係等

ロータリアンの全ての職業関係において、倫理的に行動することでありませぬ。これを別の言い方をすれば、ロータリアン一人ひとりが人々の幸せを祈る心をもつ、ということでありませぬ。この点について職業奉仕の心構えとして一つの物語を紹介しておきます。

天皇陛下が未だ皇太子殿下であらせられた頃、宇治の黄檗宗の総本山万福寺をお訪ねになったときの話であります。

接待にでられた老師は「自分は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建てられたとか、この扁額は誰が書いたとか、その様な俗な話するわけにはいかない」と言って皇太子殿下に『葦駄天』と言う仏様の話をされました。

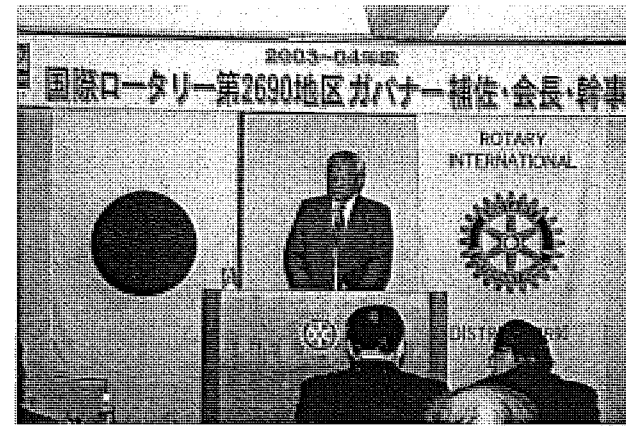
仏様にも色々位がありまして、最も位の高いのが阿彌陀如来、大日如来のように如来という字のついている仏様。その次の位が勢至菩薩、普賢菩薩のように菩薩という字のついている仏様。そしてその下の位が毘沙門天、帝釈天、葦駄天のように天という字のついている仏様であります。

この天という字のついた仏様は、どのような役目をもつた仏様かといひますと、私達の日常生活万般のことを司る役目をもつた仏様なのであります。

そこで葦駄天という仏様は、どのような仏様かと申しますと、夜の帳に終わりが来まして東の空が白んで参ります。やがて山の端に太陽がチラッと覗きます。朝日がサッと大地にさして来る、その一瞬を捉えて仏様の懐から出て、仏様の御使いとして全世界の家庭を訪れ、それぞれの家庭に今日一日の幸せを祈って、一瞬の内に舞い戻り、只今全ての家庭に仏の幸せを祈って参りましたと復命をする役目をもつた仏様のことであります。

御老師は、皇太子殿下に「貴方は、やがて天子様になられるお方でございます。毎朝全ての人達の幸せを祈る葦駄天という仏様のことを心に留めておられますように」と言う趣旨の話をされたそうであります。

申すまでもなくこの物語は、帝王学の根底に流れる思想を説いています。即ち私達は人間である以上世の中には、好きな人も嫌いな人も憎い人も沢山居ます。にも拘らず、毎朝その全ての人達の幸せを祈る葦駄天の心、これは天子様にとっては欠くことの出来ない心であろうと思うのであります。



ところで私は、この葦駄天の心は天子様に限らず、ロータリーの根底にある心であると思うのであります。何故ならばロータリアンは、会社の管理者として長たる立場にある人だからであります。長たる者が、毎朝自分の部下将兵の幸せを祈る心をもっているか否かにより、その企業のあり方が変わってくるだろうと思うのであります。これはロータリアンの人間としての魅力であり、殊に会長さん・幹事さんにとっては忘れてはならない心であろうかと思うのであります。この葦駄天の心をもつたロータリアンの企業は、恐らくどのような不況期にも潰れないであろうし、長期的に安定した利潤を獲得していくであろうと思うのであります。

これは、職業奉仕の核にある思想であると思うのであります。私は職業奉仕に限らず社会奉仕、国際奉仕そして世界社会奉仕にも、この葦駄天の心があるであろうと思うのであります。

1962-63年度の国際ロータリーのニティッシュ・ラハリー会長は世界社会奉仕を提唱し『世界中の何処かの片隅に一人でも不幸な人がいる限り、私達ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう! Kindle the spark within!』と言う有名なターゲットを打ち上げました。

これは、誠に東洋的な神秘的なターゲットであり、心の中に火を燃やすことによってこの世の中を明るくしていくというのであります。

そしてそのためには私達ロータリアンが、この世の中の全ての人達の幸せを祈らなければならないとラハリーは呼びかけているのであります。

ロータリアン全てが、お互いに幸せを祈り合うことによ

って、始めてロータリーは魅力のあるものとなるのであり、このことは、ロータリーの魅力を考える上で忘れてはならないことであろうかと思うのであります。以上、ロータリーの魅力ということに就いて長々と私見を申し述べましたが、要するにロータリーには時代の変遷につれて変わっていくものと、どのような時代にも変わってはならない本質的なものがあります。世界の動向、現象的なものが変わってもロータリーに本質的なものは変わってはならないのであります。したがって、ロータリーの魅力と言うことについても、これを具体的な実践活動その他現象的なものとして捉えれば、それは時代の変遷と共に変わって行きますが、これを思想や原理など本質的なものとして捉えれば、それは時代を超越するのであります。このようにロータリーの現象面と本質面とは、明確に区別しておかなければならないと思うのであります。

これで私の話を終わりたいと思います。御静聴有り難うございました。

